

---

# ブチ

上村忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブチ

### 【Nコード】

N57580

### 【作者名】

上村忍

### 【あらすじ】

あの頃飼っていた犬の名前ってなんだっけ？それを思い出すとき

…

(前書き)

あの頃のことって、どうして思い出せないんだろう。

小学生の時に飼っていた犬の名前を思い出すことができない。

子どもの頃は、自分で言うのもはばかられるほど、陰鬱な性格だった。

子どもなりに、自分が何もできない、取り柄がないことはわかっていたし、ヒーローになれないこともわかっていた。

友達が遊んでいる中に入ることができない。

「入れて」の一言が言えずに、遠巻きに作り笑いを浮かべている。クラスでよくいる大人びた女の子が、気を遣って話しかけてくれることはあったが、うまいことを言おうとして、結局口から出るのは、「うう、ああ」といううなり声だけだった。

そんな僕の小学校生活なんて楽しいわけはなく、学校が終わると誰とも話さずに家に直行していた。

家には犬がいた。

いつからいるのかは覚えていない。

雑種の、どちらかといえばあまり美しいとは言えない犬だった。背中に大きなブチがあったのは覚えている。

犬といえるときに、僕は安心していた。

いつも自分より「上」の人間に囲まれている日常の中、唯一自分と対等だと思えるのが、その犬だった。

僕は、普通にしてやるべきことを何もしなかった。

散歩もした記憶がない。一緒にじやれた記憶もない。お座りやお手を教えた記憶もない。

記憶があるのは、一緒に寝ころんでいたということである。

僕は、犬に向かつては話した。  
自分の思っている事を話した。

竹下君は本当にすごいんだ、算数で計算がすごく速いんだよ。  
りさちゃんも、いっつも僕の事バカにするんだ。悔しいけど、言い返せないんだ…

そんな事を話すと、犬は犬なりに、  
「そうか、そうか」と目を細めた。

僕が、中学生になる時だった。

父の転勤が決まり（当時は栄転という言葉を使っていたが、僕には意味がわからなかった）、当時住んでいた町よりも都会に引っ越すことが決まった。

犬は連れて行けないと母に言われた。

僕は、

「そう」と一言だけ返した。

引っ越しの当日、首輪をはずした。

僕たち、家族は車に乗り、犬は車に乗らなかった。

犬は車を追いかけてきたが、そのうちに走るのを止めた。

僕は後部座席でうずくまっていた。後ろのガラス越しに、犬を見ることはできなかった。見るわけには行かなかった。

そうして、僕は都会に住むことになった。

犬がいなくなり、僕は人と話すようになった。

今まで犬に話していたことを、人に話すようにしただけだったが、

そうすると人は僕に気をかけてくれることがわかった。  
衝突もあったが、そんなにたいしたことではなかった。

僕はねじ曲がった心を持つかも知れなかったが、犬に救われていた事を知った。

犬は、返事をしなかったが、優しい目をしてくれた。

同じような、優しい目をした女性と僕はつきあい始めた。

犬の話もよくした。話をすると、彼女は大抵、

「犬の名前はなんだったの？」と聞いてきたが、どうしても思い出すことはできなかった。

彼女は、笑いながら言った。

「そんなにお世話になった犬の名前を覚えていないなんて、薄情な人ね」

本当にそうだと想う。

引越しの日を思い出す。

僕は、僕を救ってくれた存在を助けることをしなかった。

母に懇願することもできただろう。いずれ死が来たかも知れないが、看取ってやることはできただろう。

何もせずに、僕は放棄していた。

そんなことを思い出すと、悔しくて、哀しくて、情けなくなる。

犬の名前をなんとしても思い出したいが、どうしてもできなかった。

そんな薄情な僕だったが、命を授かる事になった。

彼女は妻になり、母に。僕は父になることとなった。

出産の瞬間に立ち会い、今、この瞬間に父に僕はなった。  
生まれてきた子供は男の子だった。

男の子は、この世の空気に触れ、胸一杯に吸い込み、そして泣き出した。

泣いている子どもの背中には、大きなホクロがあった。  
それは、ブチに見えた。

僕は妻に声をかけた。

よくがんばったね。元気いっぱい泣いているよ。  
犬のね、名前を思い出したんだ。

あいつの背中には、大きなブチがあったんだ。  
それが一つの星に見えて、僕はあいつを

「一星」と名付けたんだ。

僕があの日、手放した命が巡ってきたよ。  
今度は僕が、この子を導いてやる番だ。

一星は、まだ大きな声で泣いていた。どちらかといえば、あまり美しくない子だったけど、僕は愛せると想った。

(後書き)

うちにも、犬、いたっけなあ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5758o/>

---

ブチ

2010年10月30日00時01分発行